

『大日經疏』から一切義成就菩薩へ：晩年の慈雲による「法華陀羅尼」注疏の経緯

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究
巻	73
ページ	1-18
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150932

『大日經疏』から一切義成就菩薩へ —晩年の慈雲による「法華陀羅尼」注疏の経緯—

秋 山 学

序. 『法華陀羅尼略解』の謎

江戸時代の高僧慈雲尊者欽光（1718-1804）による最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』（1803年3月4日校了）が筑波大学中央図書館に所蔵されていることに関して、筆者は2010年の同図書館特別展でこれを明らかにした。それ以来、筆者はいくつかの拙稿において様々な角度からこの著作の位置づけを試みてきた（秋山2017b, 2017a, 2016b, 2016a, 2015, 2012, 2010）。一方、真言宗の常用經典である『理趣經』に対する注疏『理趣經講義』が、1803年2月24日に慈雲の手で成ったことについては、従来から広く知られていた。したがって『理趣經講義』に至る慈雲の足跡については、これまで主として真言宗系の研究者により、比較的よく跡づけられてきた。しかしながら、慈雲がなぜその10日後に『法華經』の陀羅尼注疏に向かうことになったのか、その謎については未踏とも言える領域であり、筆者はこれまで確たる解答を得ることができなかった。本稿は、現在考えられうる限りで、この問題に対する解答を試みたものである。

まず、1803年当時、慈雲は天台律宗（天台真盛宗）の僧・来迎寺妙有上人（1781-1854）と出会っているということを考慮せねばならない。妙有が慈雲門下に入ったのは1803年、妙有23歳、慈雲85歳のときのことであり、同年10月に妙有は慈雲より悉曇の許可灌頂を受けている。『法華陀羅尼略解』の成稿は同年3月のことであるから、妙有が慈雲のもとを訪れて自らの意向を伝えたのは1802年末～1803年初に遡るのかもしれない。すると慈雲が、知り合ったばかりの若き天台律僧・妙有に対し、天台ゆかりの「法華陀羅尼」に粗注を付して贈呈し、妙有はこれを筆写して生涯肌身離さず持ったものと想像できよう。つまりまず、

「『法華陀羅尼略解』は

妙有との出遭いをきっかけとした、妙有へのプレゼントである」

という可能性がありうる（天台真盛宗別格本山・三重県津市西来寺の写本を参照）。

もっとも、『法華陀羅尼略解』成稿の際、慈雲の側にも「法華經陀羅尼」への関心の高まりがあったと仮定することは、もちろん不可能ではない。すると、慈雲の密教的関心が熟し、『法華經』のうち「陀羅尼」部分に注疏を施すという行為が自然に生まれたと考えられる。もしそうだとすれば、慈雲の晩年の著作の中で、『妙法蓮華經』と関わりを持ち得るものを挙げ、その中で慈雲が『妙法蓮華經』に向けていかなる見解を抱いているかを検討する、という手順を踏まねばなるまい。

1. 慈雲著『兩部曼荼羅隨聞記』

まず考えられるプロセスとしては、慈雲 1795 年の成稿になる『兩部曼荼羅隨聞記』から何か手がかりが得られないかという問いかけがあろう。この『隨聞記』は、1795 年 5 月 20 日より、慈雲が高貴寺において諦濡（1750-1830）ら 13 人の弟子のために兩部曼荼羅を講説したものを、菩提華祥榮（ぼだいげしょうずい；1750-1823）が筆記し、同年 6 月 19 日にまずその略本 2 巻として成ったものである（ちなみに祥榮が慈雲の講説を筆記した作品は 7 部 12 巻に及ぶという）。同著作には現在、広本と略本が伝わっており、本稿では広本全 6 巻をテキストとして用いる。

兩部曼荼羅とは、言うまでもなく金剛界曼荼羅および胎藏部曼荼羅の 2 部の曼荼羅を指す。前者は『金剛頂經』を、後者は『大日經』を經典として成立する曼荼羅であるが、特に後者については、東密における注疏『大日經疏』（「大疏」）のうちに、天台的要素が認められることが夙に指摘されている。これは、大疏の筆受者たる一行（683-727）が天台での修行を経ているためだと説明される。なおこの『兩部曼荼羅隨聞記』の中では、慈雲が徹頭徹尾、注疏ではなく、現図曼荼羅の方を重視する立場を貫いているという点が注目される。

この『隨聞記』広本全 6 巻は、第 1 巻が金胎兩部に通じる「大綱領」（全集 122 頁参照）、第 2・第 3 巻が金剛界諸会（計 9 会）の解説、そして第 4・第 5・第 6 巻が胎藏部曼荼羅諸院（計 13 院；ただし「四大護院」は描かれないため計 12 大院となる）に関する解説で占められている。各巻の内容を、それぞれの項目立てを通じて示すならば、次のようになる。

- 1) 密藏体性 理界智界 赤蓮白蓮 都部別尊 両部両界 両部旨要 両部誹法
東密台密 曼荼阿字 マンダラ・マントラ 秘藏声字 両重因果 両部不二
野澤浅深 灌頂印明 三十七尊 相承灌頂 神通妙用 顯密大意 顯密浅深
学密用心 曼荼羅教 普賢行願 事相教相 本地加持 四身說法 九会密記
三輪差別 五色界道 金門蓮門
- 2) 羯磨会 金剛界 金剛頂經 法応不離 中因東因 三昧耶三摩地 南方四尊
西方四尊 北方四尊 転識得智 四波羅蜜 内四供養 外四供養 四摂
五色界道 五解脱輪 六大配属 三鉢界道 空中界畔 賢劫千佛 十六尊位
二十天位 焰中三鉢 四大明王 一百八尊
- 3) 三昧耶会 諸尊三形 陀羅尼形 内四供養 蓮華座処 宝珠浅深 微細会
供養会 四因会 一因会 五佛宝冠 九会相摂 理趣会 二会融摂
降三世羯磨会 降三世三昧耶会
- 4) 胎藏金剛 三句二種 三部三昧 三重四重 瓶水所標 中台院 十界大日
ah一切色 四智四行 四行浅深 旋轉不旋轉 霧即月光 遍知院 二伽葉
持明院
- 5) 観音院 三部三点 薩埵院 大力金剛 金剛童子 釈迦院 四無量心
虚空藏院 十波羅蜜 千手金剛蔵 両部不二
- 6) 文殊院 蘇悉地院 地藏院 除蓋障院 外金剛部院 十界摂属 結勅宗要
この後「附録十由」が附せられているが、これは本稿の対象外とする。
ちなみに金剛界曼荼羅に関する解説にあっても、慈雲は変わることなく『大
日經疏』からの引用を行っている。後に見ることであるが、このあたりには、
慈雲が基調とした「金胎両部不二」の立場が貫かれていると言える。

2. 『大日經』と『大日經疏』

次に『大日經疏』（「大疏」；大正大藏経No.1796）について見ておきたい。この「大疏」は、善無畏（637-735）の講述、そして前述したように一行の筆受になり、『大日經』すなわち『大毘盧遮那成佛神変加持經』全7巻36品のうち、前6巻31品を詳述したもので、全20巻より成る。善無畏は725年に『大日經』全7巻を訳了し、そのうちの前6巻31品を一行のために講義したが、727年10月8日、一行が華嚴寺にて入滅したため、この『大日經疏』は閉じられることになった。この20巻本は空海（774-835）が請来したが、一行の遺言により、同門の智儼と温古がこれに手を加え爛脱を除いたものが14巻本であ

り、これは『大日經義釈』として知られ、わが国には円仁（794-864）が請来した。真言宗（東密）では20巻を用い（『大疏』）、天台宗（台密）では14巻本を用いる（『義釈』）。このほか台密の円珍（814-891）が10巻本を伝えている。

慈雲は東密の法統に属することから、菩提華とともに、主として『大疏』より頻繁に引用を行う。ただし『義釈』からも複数個所にわたり引用を行っており、これを参照していることが知られる。

以下『大日經』と『大日經疏』の対応関係を、『大日經』の「品」を基準に示すと下記ようになる。

入真言門住心品第一（『大疏』第1巻～第3巻）。

入曼荼羅具縁真言品第二（『大疏』第3巻～第9巻）。

息障品第三（『大疏』第9巻～第10巻）。

普通真言品第四・世間成就品第五（『大疏』第10巻）。

悉地出現品第六（『大疏』第11巻～第12巻）。

成就悉地品第七（『大疏』第12巻）。

転字輪曼荼羅行品第八（『大疏』第12巻～第13巻）。

密印品第九（『大疏』第13巻～第14巻）。

字輪品第十（『大疏』第14巻）。

秘密曼荼羅品第十一（『大疏』第14巻～第16巻）。

入秘密曼荼羅法品第十二・入秘密曼荼羅位品第十三（『大疏』第16巻）。

秘密八印品第十四・持明禁戒品第十五・阿闍梨真實智品第十六・布字品第十七（『大疏』第17巻）。

受方便学処品第十八（『大疏』第17巻～第18巻）。

次百字生品第十九・百字果相应品第二十（『大疏』第18巻）。

百字位成品第二十一・百字成就持誦品第二十二・百字真言法品第二十三・説菩提生品第二十四・三三昧耶行品第二十五・説如来品第二十六（『大疏』第19巻）。

世出世護摩法品第二十七（『大疏』第19巻～第20巻）。

説本尊三昧品第二十八・説無相三昧品第二十九・世出世持誦品第三十・囑累品第三十一（『大疏』第20巻）。

一行禪師は、元来、禪・天台・戒律を修めた僧であり、密教に関心を示した

のは、善無畏の入唐（716年）以降であった。したがって真言宗の正嫡の系譜からはやや外れるとされる。そして善無畏による『大日經』の翻訳を手助けしつつ、注釈書である『大日經疏』を著したものの、その姿勢は「中国天台の教理を以て大日經を解した」（三崎 1988：162）というものであった。

さて『大日經疏』のうち、入真言門住心品第一に関わるもの（『大疏』第1巻～第3巻）を「口の疏」、入曼荼羅具縁真言品第二（『大疏』第3巻～第9巻）以下に関わるものを「奥の疏」と呼んで区別する習わしとなっている。「口の疏」に対しては、抄出ながらも宮坂宥勝師（2011）による注解が存するほか、吉田宏哲師（1984）も『大日經』住心品を釈しつつ『大疏』への言及を頻繁に行っており、有用である。そのほか『国訳一切經』和漢撰述部（經疏部）第14（上）・第15（下）の二巻には、神林隆淨（上）・那須政隆（下）両師により、口の疏・奥の疏の全体に対する書き下し文と詳細な注解が収められている。

いま吉田宏哲師による解説を参照するなら、『大日經住心品』（ないし「口の疏」）の内容は次のように区分される（吉田 1984）。

- 1) 經題. 2) 品題. 3) 五成就の文. 4) 十九執金剛. 5) 四大菩薩.
- 6) 說法の時. 7) 瑞相. 8) 三句に対する金剛手の發問（1, 2）.
- 9) 三句に対する如來の答說（1, 2）. 10) 菩提心は無相なり.
- 11) 一切智は自心なり. 12) 心は不可得なり.
- 13) 初地菩提心の相. 14) 菩提心の出生（1, 2）. 15) 外道の我說を破す.
- 16) 順世の八心. 17) 六十心（1, 2）. 18) 三妄執（1, 2, 3）. 19) 十地.
- 20) 六無畏. 21) 十縁生句.

ちなみに空海は、『秘密曼荼羅十住心論』を著すにあたり、この『大日經疏』から大きな影響を受けたということが、かねてより指摘されてきた。両者を比較してみると、上掲の「16）順世の八心」以下で、確かに空海の説く「十住心」の諸段階が説き進められて行く。

これに対して慈雲の主唱になる「十善戒」は、上掲「20）六無畏」に含まれる「秘密主よ、彼の愚童凡夫は、諸の善業を修し、不善の業を害するときには、当に善無畏を得べし」とある『大日經』の經文に対し、『大日經疏』が「今この中の意は、十善業道を明かす」（宮坂 2011：306）と釈しており、このあたりに一つの典拠が求められるのではないかと考えられよう。

3. 『随聞記』における『大日經疏』からの引用と「大日經疏の中の法華教学」

以下慈雲が『大日經疏』から引用している箇所、『大日經疏』における出典箇所が判明しているくだりを挙げるなら、次のようになり、その数は総計20箇所を超える。なお頁数の指示は『慈雲尊者全集』に基づく。

88 頁：579b19； 91 頁：620c8； 109 頁：656a12； 110 頁：646b19；
 116 頁：657b06； 225 頁－226 頁；788 上； 236 頁：788b04；
 237 頁：789b04； 243 頁：751a； 245 頁：同上；
 246 頁：675a； 252 頁：786a09； 258 頁：639 頁； 269 頁：同左；
 276 頁：637a03. 279 頁：671； 284 頁：749c14；
 310 頁. 635c02. 686c16； 313 頁：635b13； 317 頁：634b20；
 322 頁：639a12； 323 頁：634a29.

これに、菩提華による引用箇所が加わるが、その数だけでも総計40箇所以上を数え、上掲した慈雲自身による『大疏』からの引用を併せると、膨大な数に上ることになる。

一方、浅井円道師は「大日經疏の中の法華教学」（正・続；浅井1986, 1987）において、『大日經疏』に見られる『法華經』および天台章疏の引用例として、95例を抽出している。しかしながら、筆者が慈雲および菩提華による上掲の『大日經疏』からの引用をこの95個の引用と逐一照らし合わせてみたところ、両者が合致するのはわずか2カ所に過ぎなかった。それは巻五・四無量心の項（287-91頁；「大疏」から明示して引用するのは菩提華）での引用（587b20；浅井師の引用番号（17）に当たる）、および巻六・十界撰属の項（324頁；菩提華による）での引用（642c17；浅井師の（42）に相当）の2カ所である。通覧作業を通じて気づいたのは、浅井師が終始一貫して『法華經』の観点から『大日經疏』を通読しているのに対し、慈雲は対照的に、密教の立場で『大日經疏』を読んでいるという点であり、共通性よりもむしろ両者の対照性のほうが印象的であった。

上記の2カ所のうち（42）は、「彼の優曇華は即ち遇ひ難しと雖も、然も此の真言法要は倍復之に遇ひ難し。何を以ての故に。此れは是如来の秘藏にして、長夜に守護して妄りに人に授けず」という箇所であり、「優曇華」の開花が稀であることにちなんだ『法華經』の比喩的表現への注目が慈雲にも共有されているということを示すのみである。ただ上の2カ所以外にも、（28）「妙法蓮華曼荼羅」（108〔国訳〕-610a〔大藏經〕）、（39）「多宝如来」（166-630b）、それ

に(52)「円珍による大日法華同味」(241-658a；一行が寿量品の釈迦を大日如来と一体としたと釈す)など、浅井師による注記のうちに興味深いものが見出される。しかしながら本稿では、慈雲の視点に立って考察を進めるという原則を守る意味で、(17)に当たる箇所、すなわち「四無量心観」に関わる箇所についてのみ、ここで拡充的な考察を行っておきたい。

(17)「所謂愚童凡夫はもし是の法を聞かば少しく能く信ずることあり。識性の二乗は自ら観察すと雖も、未だ実の如く知らず。もし実の如く自ら知らば即ちこれ初発心の時に便ち正覚を成ず」。この後にすぐ、『法華經』信解品第四より長者窮子の譬喩が引かれている(国訳29頁；慈雲291頁)。

菩提華は『大日經疏』より「初発心の時に便ち正覚を成ず。生死を動ぜずして涅槃に至ると」を引いている(291頁)。それに先立ち慈雲は、『随聞記』の中で、「舍利弗等、諸大声聞、梅檀香等の辟支佛」という「文」に対し、「(和上曰)皆是れ從顕入密の尊にして、均しく金剛名号あり。小野七集に出たり。故に其の徳三世の諸佛に等し。是の故に名づけて受用身とす。十界の中、縁覚声聞界の相を改めずして即是れ受用身なり。是れ密教の規模なり」と語っている(290-291頁)。

この箇所は胎藏部曼荼羅の解説に当たる『随聞記』第5巻中「四無量心」のうちに含まれるが、この項「四無量心」は、同曼荼羅「釈迦院」に続きつつ同院に含まれる部分であり、「四無量心」の次には「虚空蔵院」が続く。慈雲はこの「虚空蔵院」の冒頭で「(和上曰)釈迦院、虚空蔵院一具の法門なり」としており、釈迦院と虚空蔵院を一体のものと解している。この点は、現代における諸々の曼荼羅解説書には見られない特徴であり、ここから慈雲独自の曼荼羅観を読み取ることができるかも知れない。

釈迦院をめぐって、胎藏部曼荼羅では釈尊に三つの受け止め方が見られるとされる(以下、小峰ほか1993:94)。その第一は、釈尊の悟りそのものを中台八葉院の中央に坐す大日如来(法界体性智)として示し、第二はその悟りの一展開を北方の天鼓雷音如来(成所作智)で示すものである。そして第三に、この釈迦院としての示し方がある。この釈迦院では、釈尊による具体的な衆生教化としての智慧の實際が語られる。釈迦院には、釈尊を中心に計39尊が描かれ、それは4種(①釈尊と4侍尊、②8佛頂尊、③佛徳を示す14尊、④声聞・縁覚12尊)に分類される。このうち③の諸尊の中で、如来慈・如来悲・如来喜・如来捨の諸菩薩は、四無量心(慈・悲・喜・捨)を尊格化したものである。また④には舍利弗など釈尊の直弟子たちや、独覚である梅檀香辟支佛ら

が描かれるが、これは法が現実に展開したことを指すとされる（小峰 2016：112）。

このような曼荼羅の現図を見ながら、慈雲はまず（③をめぐり）「其の（つまり法の）慈は衆生をして普賢に同じ。其の悲は衆生をして虚空蔵に同じ。其の喜は衆生をして観音に同じ。其の捨は衆生をして虚空庫に同じ。其の心普く法界に遍ず。故に共に無量心と云ふ。是れ此の観の大意なり」（289-290 頁）とする。このように「四無量心」を「普賢・虚空蔵・観音・虚空庫（毘首羯磨）」の4菩薩に振り分ける理解は、『理趣経』第12段（外金剛部会）に対する『理趣釈』の解釈に発する（後述）。一方（④をめぐり）先に引いたように、慈雲は、密教の理解によればこれらの諸尊はいずれも從頭入密の諸佛と理解される、とするのである。

そもそも「四無量心」とは『俱舍論』（巻29）に由来するもので、いわゆる小乗の教えにも利他行が説かれていることの証左として貴重である（高崎 1983：166）。「四無量心」は大乗たる唯識にも受け継がれつつ（深浦 1954：682）、利他行を旨とする大乗では「六波羅蜜」が基盤に据えられることになる。六波羅蜜の内実は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若の6種に分かたれるが、その最後の般若波羅蜜の働きは4項に開かれ、方便・願・力・智が加えられて、計十波羅蜜として挙げられる（高崎 1983：167）。

この「十波羅蜜」に関する説明は、『随聞記』の記述にあって「虚空蔵院」の次に置かれる。この項「十波羅蜜」において慈雲は、「方願力智の四波羅蜜は第六般若波羅蜜より開くなり。故に三句を以て配せば方願力智は即ち方便為究竟（「方便を究竟とす」）の句なり」（293 頁）とする。「方便を究竟とす」とは、『大日経』住心品にある「三句の法門」（「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」；宮坂 2011：30-31）、すなわち『大日経』のエッセンスのうち、最後の部分に相当する句である。かくして慈雲は、「四無量心」から「三句の法門」までを一連の曼荼羅観において統一的に理解していると考えられる。

『理趣釈』では、先の「四無量心」に関わる一節が、＜「いわゆる一切の有情は如来蔵なり、普賢菩薩の一切の我を以ての故に」＞に始まり、＜「一切の有情は羯磨蔵なり」の「羯磨蔵」とは、すなはち毘首羯磨菩薩なり。「よく所作を作す性と相應するが故に」とは、「一切の有情は成所作智の性を離れず、よく八相成道の所作の三業の化をなして、諸の有情をして調伏と相應せしむるなり」＞（宮坂 2011：455-456）にまで続く一節に含まれている。ここでの「三

業」とは「身・語・意」を指すため、これは『大日經』冒頭部（前掲の分類では「6. 説法の時」）の「三平等の法門」（吉田 1984：20-21）に典拠を見出す。

「三平等の法門」とは、「いわゆる三時を越えたる如来の日、加持の故に、身語意平等句の法門なり」（『大日經』；宮坂 2011：21）に遡る一節を指し、説法の時が無始無終・常恒であり、如来の身体と言葉とところの働きが、身体は言葉に、言葉は意にまったく等しく、あたかも大海の塩味が同一のようにまったく平等である、との意味を表す。『大日經疏』には「平等の法門はすなはちこの經の大意なり」（宮坂 2011：218）とある（『兩部曼荼羅隨聞記』326 頁をも参照）。通常、上掲した「三句の法門」の方が注目されることが多いが、「三句の法門」よりも「三平等句の法門」のほうが先に説かれるわけでもあり、慈雲がこの「三平等句の法門」を強調する点には注目しておきたい。

四無量心に関する記述は、上掲した『理趣釈』のほか、『五秘密軌』（『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』）にも見られる（大正 20：536 上）。この『五秘密軌』末尾では「三句の法門」が意識されており、慈雲は『金剛薩埵修行儀軌私記』（1802 年）の終結部をこの『五秘密軌』の注解に当てている。『五秘密軌』本文を含めて慈雲の注記を引くなら、

「次に＜四無量觀＞是の思惟をなせ。我まさに金剛薩埵大勇猛の心を発すべし。一切有情如来藏の性を具せり。普賢菩薩一切有情に徧するが故に、我一切衆生をして金剛薩埵の位を証得せしめんと」。「また是の思惟をなせ。一切有情は金剛藏の性なり。未来に必ず金剛灌頂を獲るが故に、我一切衆生をして速やかに大菩薩灌頂地を得て、虚空藏菩薩の位を証得せしめんと」。「また是の思惟をなせ。一切有情は妙法藏の性なり。能く一切の語言を転ずるが故に、我一切衆生をして一切の大乘修多羅藏を聞くことを得て觀自在菩薩の位を証得せしめんと」。「また是の思惟をなせ。一切有情は羯磨藏の性なり。善能く一切事業を成弁するが故に、我一切衆生をして諸の如来の所に於て広大の供養をなし、毘首羯磨菩薩の位を証得せしめんと」。

松長有慶師によれば「如来藏を普賢菩薩に配する考えは、玄奘訳『般若理趣分』に現れている。しかし金剛藏、妙法藏、羯磨藏を合わせて四藏を、金剛薩埵、虚空藏、觀自在、毘首羯磨の四菩薩に配する思想は、不空訳『五秘密儀軌』の四無量心觀を説く箇所が初見である。不空は、そのうち金剛薩埵を普賢菩薩の名に戻して、他をそのまま『理趣釈』に採用し、さらに四智に当てはめたものと思われる」（松長 2006：194）とされる。

こうして『兩部曼荼羅隨聞記』に現れる慈雲の「四無量心」論は、胎藏部曼

荼羅の釈迦院をめぐる注記すなわち史上の釈尊に発しつつ、唯識における四智を取り込み、その利他性をさらに展開させて密教に到達する。その意味でこの「四無量心」論は、釈尊とその密教的帰結の結節点に位置すると言える。『随聞記』の「十波羅蜜」項の直前、「虚空蔵院」項の末尾には、「金薩釈迦一体」に関する記述があり（菩提華による）、「理趣經に云く、一切義成就金剛手菩薩摩訶薩と。是なり。一切義成就是即ち是れ釈迦菩薩たりし時の名なるが故に」と記されている。この「一切義成就菩薩」こそ、顕密の境界に位置する存在だと予想されるが、これについては後述することとし、ここでは「四無量心論」と『理趣釈』、『五秘密軌』の関連性を示唆するにとどめよう。

4. 慈雲著『兩部曼荼羅隨聞記』読解

いま『五秘密軌』ならびに『理趣釈』に連なる「四無量心」観について、慈雲は『兩部曼荼羅隨聞記』の中でも特別な注意を払っていることが理解された。これを手がかりに『隨聞記』全般にわたる読解を進めてゆくことにしよう。

第1巻

83頁：「興教大師云、華嚴は則ち金剛頂經の淺略、法華は則ち大日經王の淺略と。説き得て妙なり」。ここにはひとまず、慈雲による、『法華經』と『大日經』の通底性への着目があると考えてよいだろう。

102頁：「金智無畏共に龍智に従てともに兩部の大法を伝ふ。故に無畏大疏の中、往々金剛頂大本を引て釈し給ふ。此れ其の証なり。唯其の翻譯、無畏は胎藏部を翻じ金智は金剛頂部を訳す。此を以て異とするのみ」。ここで慈雲は、龍智の弟子に善無畏と金剛智という二人の弟子があり、善無畏は『大日經』を授けられる一方、金剛智は『金剛頂經』を受け、両者が唐において接見した際、善無畏・金剛智ともに自らの持する經典を互いに授け合った、という「金善互授の大事」の説話的伝承を否定している。

第2巻

124頁：「慈覺の金剛頂經疏に云ふ。金剛と言ふはこれ堅固利用の二義。即ち喩の名なり（以下略）」。慈雲曰「此の釈、可なり。なほ未だし」。慈雲は、後にも見るように、慈覺大師円仁（794-864）に対して、批判を極めるという態度は採っていない。

126頁：「金剛頂經成身会に当流口伝六十九箇所あり」とあり、以下「文」との指示のもとに、經典から引用が行われる。これは『金剛頂經』（大正865）

である。慈雲の口伝解説は69番で終わり、『金剛頂經』で言うならば、金剛索菩薩「設入諸微塵」（遠藤1985：287）にまで及ぶ。

129頁：「文に云く、一切義成就菩薩、菩提場に坐し、往詣して受用身を示現す」。和上曰く「此の一切義成就、これを本有薩埵と習ふ。即これ行者なり。此れ相承の義なり。故に慈覺の疏にも、これを金剛薩埵と云ふ。随分その通りなり。顕家にして宿福なることなり。金剛薩埵、直ちに顕機は悉達太子と見る。釈迦如来摩竭陀（マガタ）の菩提道場に坐し給ふと見る。悪業障の者は此だも見るに能はず。然るに其の菩提場、応化の在る処を見て即色究竟天と見るなり。此の天に法爾常恒加持を見て、五相成身、初めより本有円成なり」。

一切義成就菩薩は、釈迦牟尼仏出家以前の名であり、アサハナカ三摩地より起ちて五相成身を觀じたとされる（遠藤1985：74-75）。この菩薩は『理趣釈』に一度（609b11）、『觀智儀軌』に一度（595c08）、『五秘密軌』に一度（538c25）登場する。この菩薩像については後ほど検討を加える。ここで「常恒」に関しては、『理趣經』のうちに「常恒に、三世一切の時に、身語意業の金剛の大毘盧遮那如来」とある（宮坂2011：323）。一方「法爾」は「本有」とも言い換えられる（横山1986：398）。この箇所での慈雲の円仁に対する認識に注目したい。慈雲は円仁を、顕家と受け取った上でその理解の密教的深さに思い至っている。

131頁：菩提華により『五秘密經』より引用が行われる。「金剛薩埵は是自性身。不生不滅にして量虚空に同じなれば、則ち是れ遍法界身なり」。

133頁：菩提華により同じく『五秘密經』より引用が行われる。「金剛薩埵とは是普賢菩薩一切如来の長子なり。是一切如来の菩提心なり」。『五秘密軌』からの繰り返しの引用に注目したい。

139頁：菩提華の引用中に「三句義」が引かれる。それに先行する慈雲の文に「中因は則今の薄伽梵釈迦牟尼如来これなり。東因は則阿闍如来これなり」とあり、釈迦如来と大日如来の一体視觀があることが注目されよう。

144頁：慈雲は、空海が『十住心論』の中で、法華を第八、華嚴を第九に置いたことに言及し、それを追認する認識を示している。

147頁：五智への言及が注目される。

170頁：法華と華嚴に関する言及、さらにはそれに連関しての神道觀を慈雲が披瀝する。上記144頁の論調に等しい。

第3卷

199頁：慈雲による『理趣釈』からの引用がある（「所謂二根交会して五塵

大佛事を成する」が引かれる)。

202 頁：五佛灌頂に関連し、一印会の大日が理智不二を顕示することが明かされる。

206 頁：「五秘密の儀軌頂受すべし」、「この曼荼と五秘密とを以て深とすべし」との慈雲の注記が注目されよう。

209 頁：「五秘密はこれ密教の源底にして、独り薩埵の三昧のみに非ず。故に大日にもまたこの義あるなり」との慈雲の言及が注目される。

214 頁。菩提華が『五秘密経』より「金剛薩埵はこれ自性身... 金剛薩埵はこれ普賢菩薩なり。即一切如来の長子なり。これ一切如来の菩提心なり... 金剛薩埵大智印に住す」と断続的に引用する。これらの諸節は菩提華が頻繁に引用する句である。

第4巻

227 頁：以下「三句二種」のくだりであるが、「この故にまさに知るべし。如来果上にして三句を説かば、中台を因とし八葉を根とし三重壇を合して究竟の句とするなり。行者の因中にして説けば、外院を因として第二第三を根とし中台を究竟の句とするなり」との慈雲の文があり、これは『大日経疏』嘱累品第三十一（大正 787c）における解釈と一致している（小峰 2016：67）。

228 頁：『理趣釈』からの引用がある。「如上に積するところの八大菩薩は、三種法を撰す。いわゆる菩提心・大悲・方便、これなり。如上に積するところの諸菩薩は、一切の仏法、真言門及び一切の顕大乘を包括す」。この部分に関して、慈雲（ないし菩提華）は「三種法門」と読む。

230 頁：「中院は自性身」「一重二重は受用身」「三重は变化身」「外金剛部は等流身」とする解釈が注目される（小峰 2016：72）。

238 頁：慈雲は胎藏部曼荼羅に関し、「無漏大定に住して悲智その中に具せり。その智を開て金剛部とし、その悲を分かちて蓮華部とし、その大定たる固より佛部とす」とする。慈雲による理智不二の原則を読み取ることができよう。

243 頁以下。「四行浅深」に関して、爛脱をめぐる慈雲の指摘は、現在の『国訳一切経』にも受け入れられている。

249 頁：慈雲は四智および四行を旋らす。ただし「四行の回転は当流の所伝なり... 普賢は不回転なり」。金剛界と胎藏部の交流であり、ここにも「理智不二」の原則が貫かれている。

250 頁-251 頁：「一行阿闍梨の疏、古今独歩なり。その初め、普寂に就きて禅法を受け、達磨宗北漸の趣を究め給へり。此れより密に入りて無畏の親伝を

受く。故に疏釈の妙は賢首天台の比する所にあらず。然れども受学に至りては、阿闍梨所伝の図のみにして、現図の深秘を隔つ」とあり、慈雲は一行のユニークな経歴に敬意を払いつつも、現図曼荼羅優位の原則を崩さない。

第5巻

272 頁：慈雲は「大日は不回転、薩埵は回転なり」とし、回転不回転の原則を明らかにしている。

278 頁。慈雲の弁に「真言密教は三世常恒の法門にして、会三歸一の法門も此の七佛の化迹なり。久遠実成も三時の中、一時の無辺際を開示す」と語られ、ここに「三平等句の法門」との関連が問われる。次項を参照。

287 頁以下：前節に検討したように、ここに「四無量心」に関する言及がある。『理趣釈』の「外金剛部会」（宮坂 2011：455）をこの四無量心で釈すのは、慈雲の特質の一つと言ってよいかもしれない。『大日經疏』具縁品第2にはこの「四無量心」という語彙が載る（651a；『大疏』の中でこの箇所のみ）。

292 頁：「虚空蔵院」に関する説明である。（慈雲曰く）「理趣釈経には、三宝の中、此の虚空蔵を僧宝に配し、観音を法宝に配し、金薩を仏宝に配す（宮坂 2011：464）。何となれば金薩と釈迦と一体の伝あるが故なり」。ここで慈雲は、『理趣釈』のような解釈の理由をさらに推測し、金剛薩埵が三宝のうち仏宝に配される理由に関して、これが金剛薩埵釈迦如来の一体観によるものと判断している。以下、上掲したように菩提華の注記が続く（「金薩釈迦一体とは何ぞ。理趣経に云く、一切義成就金剛手菩薩摩訶薩と。是なり。一切義成就是即ち、これ釈迦の菩薩たりし時の名なるが故に、因果不二の故に以て佛宝に配す」。なお松長 2006：93 をも参照）。

293 頁。これも既述したが、慈雲は、四波羅蜜すなわち方願力智は、第六般若から開くが故に「三句を以て配せば、方願力智は即ち方便究竟の句なり」とする。

296 頁。三聚淨戒（摂律儀戒・摂善法戒・饒益有情戒）を法身佛・報身佛・応身佛に配する解釈が注目される。

301～303 頁。慈雲による五部（蓮華部、金剛部、佛部、十宝部、羯磨部）が注目される。これは「五秘密軌」の末尾部において展開される解釈を、慈雲がこの曼荼羅解釈に適用したものである（秋山 2017b：18）。この部分は胎藏部曼荼羅の釈部であるから、やはり慈雲による理智不二の原則を読み取ることができよう。

304 頁。（慈雲曰く）「金剛線を引くに就て、また兩部不二の義あり。いはく、

東北の隅より始めて南西北と次第して引くなり。故にその始めたる金剛部の右に当たる。即ちこれ東北隅は理智不二の方なるが故に、以て深秘とす。この伝あるが故に釈迦、自受他受の二身を成ずるなり。即是上転門下転門を成ずるなり」。

後に見るように、慈雲は釈迦の成道の方角を東としている。理智不二の方角を東方とする彼の理解との間に関連性を求めることができるかも知れない。

第6巻

326頁。菩提華の釈に「三平等句の法門」（「平等の法門はすなはちこの経の大意なり」；大正583a27）があり、これをもって『両部曼荼羅随聞記』は閉じられることになる。

5. 『理趣釈』と「五秘密経」

以上、慈雲の『両部曼荼羅随聞記』を通覧してみて気づくのは、『大日経疏』からの引用もさることながら、『理趣釈』そして『五秘密経』からの引用が多いという点である。

三崎良周師による『台密の研究』によれば、不空訳とされる『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』の末尾に、＜大方便とは、三密金剛を以て増上縁と為し、能く毘盧遮那清浄の三身の果位を証す＞とあって（三崎師は、これは方便としての三密を示していると解する）、その前に＜菩提心を因と為す、因に二種有り。無辺の有情を度すを因と為し、無上菩提を果と為す。また次に大悲を根と為す、兼ねて大悲心に住すれば、二乗の境界の風も動揺能はざる所なり。皆大方便に由る＞と、大日経巻一にいう三句が用いられていることは、この儀軌『五秘密軌』も金胎合揉を示すものであることから推して、翻訳ではなく撰述であると考えられる、とされる（三崎1988：39）。一方『理趣釈』の中には『大日経』に見られる「三句の法門」から『理趣経』本文を解釈しようとする箇所が見られ（宮坂2011：336, 358）、これは『理趣釈』の合揉性を証しする箇所と言えるであろう。

いずれにせよ、慈雲は『両部曼荼羅随聞記』のなかで、金胎不二・理智不二の原則を徹底させていたということを強調しておきたい。

そしてさらに、ここに加えて注目したいのは「一切義成就菩薩」（宮坂2011：353）への慈雲の注目である。

一切義成就菩薩について、『金剛頂経』冒頭部に近い「五相成身観」では「薄

伽梵大菩提心普賢大菩薩は、一切如来心に住したもう。時に一切如来、この仏世界に満ちたもうこと猶し胡麻の如し。爾の時、一切如来雲集し、一切義成就菩薩魔訶薩の菩提場に坐せるにおいて、住詣して受用身を示現し、ことごとくこの言を作す。善男子よ、云何が無上正等菩提を証するや、一切如来の真実を知らずして諸の苦行を忍ばんや。時に一切義成就菩薩は、一切如来の驚覚に由りて、即ち阿娑頻那迦三摩地より起ち、一切如来を礼して白して言さく」と語られる。なお慈雲は『教王經釈』などの著作においても、『金剛頂經』に対する釈を、上に引いた部分から始めるのを常としている。この菩薩は『妙法蓮華經』には登場しないため、密教側からの理論建てによる釈尊理解の一端と考えてよいであろう。

ところで筆者は既出の拙稿において（秋山 2012）、「法華陀羅尼略解」執筆の背景には、『妙法蓮華經』を密教的立場から、金胎不二の立場で合揉して儀軌化した『観智儀軌』、すなわち『成就妙法蓮華經観智儀軌』の影響があったのではないかとする見解を示しておいた。この『観智儀軌』のうちに、一切義成就菩薩は 595c08 に登場する。一方この『観智儀軌』には「一切の有情は如来藏の性なり。普賢菩薩の身一切に遍ずるが故に、我れと普賢及び諸の有情と無二無別なり」とあるため（大正 1000：601a7）、『兩部曼荼羅隨聞記』ほかに見られた、慈雲による「四無量心観」とも通底する考えを探ることができる。

これに対し『大日經疏』には「一切義成就菩薩」は登場しない。ところが慈雲は、上掲したように『兩部曼荼羅隨聞記』の 129 頁において「一切義成就菩薩」に言及していた。これは『金剛頂經』の中にはこの「一切義成就菩薩」が登場し、これに円仁が自らの疏（『金剛頂王經疏』）の中で言及しているためである。そして慈雲は上掲の 292 頁、すなわち胎藏部に関する釈の中で、おそらくはこの円仁の釈を背景にしながら「金薩釈迦一体観」に触れているのである。

もう一度まとめると、一切義成就菩薩は、『金剛頂王經』のほか、『観智儀軌』『理趣釈』『五秘密經』に見られ、確かに「顕密の潮目」に位置する存在だと言える。

6. 短篇法語「兩部不二」より

いま、晩年における慈雲の金胎不二・合揉の思想を見極めるために、短篇法語「兩部不二」より以下にその全文を引いておくことにしよう。

「見ざれば止みね。もし眼を開て見れば、上に蒼々たるを天と名づく。下に塊然たるを地と名づく。此の天地元来活し来たりて千古たがはず、此の中物あり理あり、互に相應して一縁起となる。年月日時生ず。過去未来現在あらはる。東西南北わかる。上下廣狹そなはる。染汚縁起して衆生界となり、清浄縁起して佛界となる。

一切義成就菩薩三祇行満じ、諸衆生機縁すでに熟して、摩揭提国優留頻羅の管内、菩提樹下金剛宝石座上に東面し坐したまふ。後夜に諸魔を降伏して明星現ずる時、無上正覚を成じたまふ。其の身十方世界に遍じて一智身なり。一智身とは一二三に対する一ならず。恒沙の功德を満足して起滅辺際不可得なり。無数の数量無限の限際、四智心品四方に位して五智円成す。其の五佛の宝冠豎に涯際を云ふべからず。横に塵沙の差別を見る。五智各五智定慧相加はって三十七智現ず。千佛圍繞して五類天來侍し、かの帝網の如し。是を曼荼羅身と一異を云ふべからず、廣狹を論ずべからず。未来際を盡して金剛界五解脱輪なり。此の智身理に相應して胎藏十三大院を見る。もとより別処にあらず。相對も對にあらず。本有にして常に縁起す。縁起して常恒不變の本有なり。更に十三大院の趣を尋ぬべし。更に自性会を尋ぬべし」。

これは栃木県小林正盛師所蔵の写本によるとされ、『短篇法語集』に収められるものの一篇である。ここには、歴史的釈尊を映す「一切義成就菩薩」が、密教的行へと移り、金剛薩埵へと変容を遂げてゆく経緯が見事に活写されているだけでなく、晩年の慈雲における神道・仏道・密教の理解が簡潔に集約されていると言えるだろう。

結．顕密の境界に立つ「一切義成就菩薩」

『大日経』は元来、佛の智慧すなわち一切智智の実相を、衆生の淨菩提心の展開として説くことにその本質を有すると伝統的に理解されてきた（『具縁品』）。『大日経疏』は、真言宗所依の「大疏」として、慈雲もこれに日々親しんできた。おそらく慈雲は「十善戒」を含む彼の戒律思想を、この疏を基に編み出したものと考えられる。その根拠は「入真言門住心品第一」のうち「六無畏」に注を付す『大毘盧遮那成佛經疏』卷第三に「今この中の意は、十善業道を明かす」とあるからである（宮坂 2011 : 306）。

もっとも慈雲は『大日經疏』そのものに接する際に、これを通して円仁や一行の天台学に達しようとする意向を見せることはまったくなかったと言ってよい。慈雲はこの時期、もっぱら密教、それも金胎不二の密教思想を貫くことで、金剛薩埵への合一を目指していたものと考えられよう。

しかしながら『大日經疏』との関わりの中で、文献学者たる慈雲は、円仁の請来になる『大日教義釈』あるいは円仁の手になる『金剛頂大教王經疏』などをも参観することとなり、その際に円仁らに代表される形で主唱された「金薩釈迦一体観」を育むことになった。その過程で立ち現れたのが「一切義成就菩薩」だったのである。

この「一切義成就菩薩」は、『金剛頂王經』『観智儀軌』『理趣釈』『五秘密經』に登場し、顕密の境界部に立つ菩薩である。『観智儀軌』『理趣釈』『五秘密經』といった經疏には合揉の要素が色濃く、慈雲は理智不二の境地を極める中で、『妙法蓮華經』に関しては、その陀羅尼部に限定するかたちで、示寂の1年前(1803年)の春、ちょうど天台律宗僧妙有との交わりが育まれる折に、注疏を試みた。これが筑波大学附属図書館に、慈雲による直筆本の形で所蔵される「法華陀羅尼略解」であると推測したい。

【参考文献】

- 秋山 学 2017b 「「五悔」から「五秘密」へ—慈雲著『金剛薩埵修行儀軌私記』(1802年)の位置づけをめぐって」『文藝言語研究 文藝篇』72, 1-45.
- 秋山 学 2017a 「慈雲尊者の無表論—『表無表章随文釈』を中心に—」筑波大学『地域研究』38, 1-18.
- 秋山 学 2016b 「慈雲尊者最晩年期の密教思想—『理趣經講義』から『法華陀羅尼略解』へ」『異文化理解とパフォーマンス』春風社, 282-300.
- 秋山 学 2016a 「義浄と慈雲尊者—有部律から四分律へ、そして正法律へ—」「東アジア文化の基層としての儒教イメージに関する研究」論文集, 19-32, 筑波大学日本美術史研究室.
- 秋山 学 2015 「慈雲尊者による儒教理解—『神儒偶談』『法華陀羅尼略解』『雙龍大和上垂示』を手がかりに—」『古典古代学』第7号, 39-66.
- 秋山 学 2012 「慈雲と天台僧たち—『法華陀羅尼略解』の位置づけをめぐって」『文藝言語研究 文藝篇』62, 1-41.
- 秋山 学 2010 「慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—」筑波大学.
- 浅井圓道 1986 「大日經疏の中の法華教学」立正大学大学院紀要第2号 1-22 頁.
- 同 1987 「大日經疏の中の法華教学(続)」立正大学大学院紀要第3号 1-13 頁.
- 伊藤堯貴 2004 「慈雲尊者と密教—『兩部曼荼羅隨聞記』を中心として」現代密教 17, 177-201.

- 遠藤祐純 1985『智山教化資料第13集 金剛頂經入門』真言宗智山派宗務庁.
小野玄妙（編纂）1964『仏書解説大辞典』（改訂）大東出版社.
金岡秀友 1989『密教の哲学』講談社学術文庫.
神林隆浄・那須政隆訳 1939-1965『大日経疏』大東出版社（『国訳一切経』和漢撰述部【経疏部】第14・第15）.
小峰彌彦 2016『曼荼羅入門』角川ソフィア文庫.
小峰彌彦ほか解説 1993『曼荼羅図典』大法輪閣.
西大寺編 2006『金田元成和尚著作集』東方出版.
高崎直道 1983『仏教入門』東京大学出版会.
中村元 1975『仏教語大辞典』東京書籍.
中村元ほか（編集）2001『岩波 仏教辞典』岩波書店.
長谷宝秀（編）1926『慈雲尊者全集』〔全19巻〕思文閣出版（再版）.
深浦正文 1954『唯識学研究』（下巻：教義編）大法輪閣.
松長有慶 1989『密教』中公文庫.
同 2006『理趣経講讃』大法輪閣.
三崎良周 1988『台密の研究』創文社.
密教大辞典編纂会 1931『密教大辞典』法蔵館.
宮坂宥勝 2011『密教経典』講談社学術文庫.
横山紘一 1986『唯識とは何か』春秋社.
吉田宏哲 1984『智山教化資料第12集 大日経住心品解説』真言宗智山派宗務庁.
米田弘仁 2001「東密における『大日経疏』研究概観—弘法大師の『大日経』解釈をめぐって」『密教文化』206号1-20頁.
頼富本宏 2000『『大日経』入門 慈悲のマンダラ世界』大法輪閣.
同 2005『『金剛頂経』入門 即身成仏への道』大法輪閣.